

# 保育所・幼稚園における「障害のある」子どもおよび、「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究 (3)

－ 「運動会」に向けた活動展開における保育所・幼稚園の傾向に着目して－

## Questionnaire Survey on Nursery School and Kindergarten Children with Disabilities and Difficult Behavior (3)

－ Focus Attention on Trend of Nursery School and Kindergarten Pertinent to Development toward Athletic Meets －

広瀬 由紀<sup>1</sup> 佐藤 愼二<sup>2</sup> 高倉 誠一<sup>3</sup>  
植草 一世<sup>4</sup> 中坪 晃一<sup>5</sup>

本稿では、保育所や幼稚園での、特別な支援を要する子どもたちに対する適切な対応を検討するために実施した質問紙調査の結果から、①C県内の保育所・幼稚園における障害のある子および「気になる」子どもの在籍に関する現状、②特別行事「運動会」に向けた活動展開および具体的な配慮や援助の実際、に関する内容を報告した。

得られた結果からは、特別な支援を要する子どもたちを含めた保育展開にあり、参加度の調整等、当該幼児への個別的な配慮が多く行われている一方で、お集まりの内容を工夫するなど保育所および幼稚園で過ごす子どもたち全体と関わる配慮に関しては、今後さらに検討が可能な領域であることが示唆された。

また、運動会を「特別行事」として捉えるか、「普段の保育の延長」として捉えるかという点および当該幼児の活動参加に向けて、種目そのものを検討するという包括的な視野に立っての配慮に関しては、保育所と幼稚園でその傾向に有意な差が見られた。

キーワード：運動会、障害のある子・気になる子、活動参加、活動展開、保育所・幼稚園の違い

### 1. 問題と目的

筆者らは、保育所や幼稚園での、特別な支援を要する子どもたちに対する適切な対応の検討を行うため、先行研究の課題を踏まえ、特別行事の一つである運動会とそこでの具体的な支援のありように着目した質問紙調査を実施した<sup>1)</sup>。調査結果のうち、障害のある子どもおよび「気になる」子どもの様子に関しては、すでに報告したとおりである<sup>2)</sup>。

本報告では、得られた調査結果について、①C県内の保育所・幼稚園における障害のある子および「気になる」子どもの在籍に関する現状、②特別行

事「運動会」に向けた活動展開および具体的な配慮や援助の実際、に関する内容を報告する。

加えて、得られた結果を基に、①運動会に向けた活動展開の実際（全体的な傾向）、②「保育所」と「幼稚園」で見られた傾向、に関して考察を加える。

### 2. 方法

- (ア) 調査対象：C県内全ての保育所（678カ所）および幼稚園（591カ所） 計1269カ所
- (イ) 調査方法：調査票郵送方式
- (ウ) 調査期間：2006年2月

1, 4 植草学園大学

2, 3, 5 植草学園短期大学

(エ) 回収率：477カ所（37.6%）

（内訳：保育所277カ所・幼稚園184カ所・不明16カ所）

(オ) 分析方法：単純集計後、クロス表で変数に順序がない場合については、 $X^2$ 独立性の検定、1変数に順序がある場合は、Kruskal Wallis検定を用いて分析を行った。また、記述式の回答は、千葉大学教育学部附属特別支援学校の実践研究の枠組みを参考にし、カテゴリーに分け、分析を試みた。

### 3. 結果

(ア) C県内の保育所・幼稚園における障害のある子どもおよび「気になる」子どもの在籍に関する現状

表1で示すように、医学的な診断を伴う障害のある

子どもは、254カ所（53.2%）、の保育所・幼稚園で在籍していた。在籍先の別を「公立」「私立」の別、「保育所」「幼稚園」の別に分けて分析すると（図1）、「公立」・「保育所」群の70%が、「（在籍）あり」と回答していた一方で、その他の群では、障害のある子の在籍に関して、過半数の回答は得られなかった。C県内では、障害のある子どもの受け入れに関して、保育所と幼稚園で（ $x^2=10.4$ ,  $p<.01$ ）、さらには私立保育所と公立保育所で（ $x^2=40.3$ ,  $p<.01$ ）、有意な差が見られた。

一方、いわゆる「気になる」子どもについては、285カ所（59.7%）の保育所・幼稚園で在籍していた。障害のある子の在籍と同様に、 $X^2$ 独立性検定を行った結果、「気になる」子どもの保育所・幼稚園による受け入れに関しては、有意な差が認められなかった（ $x^2=2.9$ ,  $p>.05$ ）。

表1 障害のある子どもおよび気になる子どもの在籍状況（全体）

	気になる子ども （在籍）	気になる子ども （在籍なし）	無回答	総数
障害のある子ども（在籍）	207 (43.4%)	39 ( 8.2%)	8 (1.7%)	254 ( 53.2%)
障害のある子ども（在籍なし）	73 (15.3%)	113 (23.7%)	14 (2.9%)	200 ( 41.9%)
無回答	5 ( 1.0%)	0 ( 0.0%)	18 (3.8%)	23 ( 4.8%)
総数	285 (59.7%)	152 (31.9%)	40 (8.4%)	477 (100.0%)

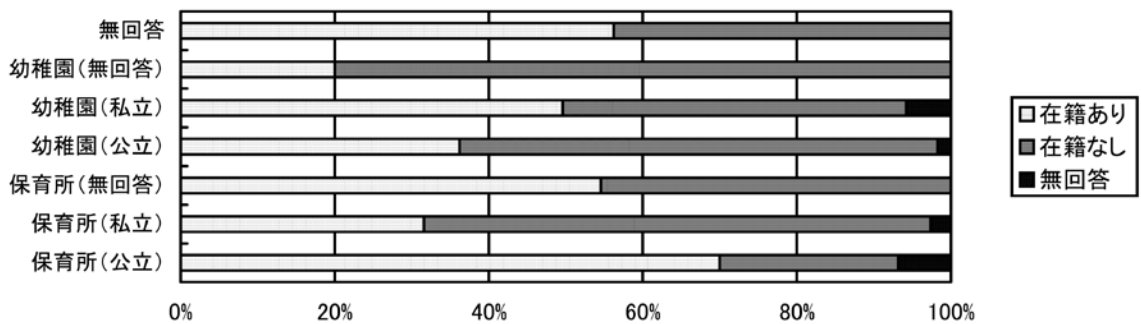


図1 障害のある子どもの在籍状況（幼保および公私別）

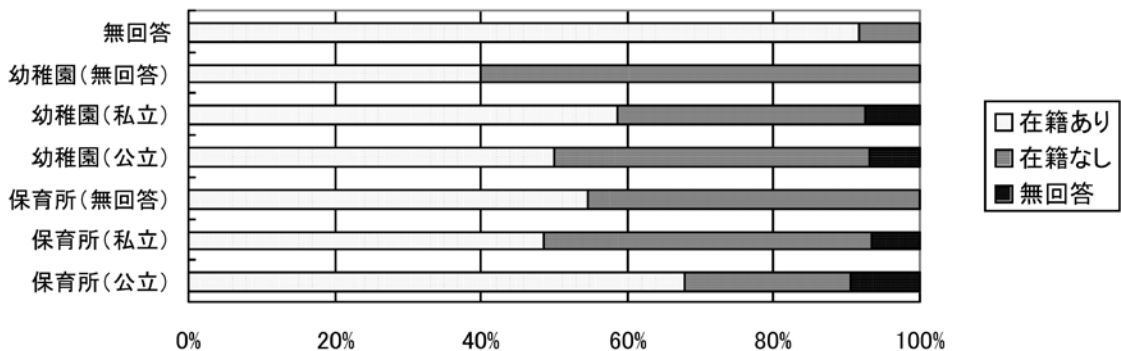


図2 「気になる」子どもの在籍状況（幼保および公私別）

障害のある子どもと「気になる」子どもとが、一緒に在籍していると回答した保育所・幼稚園は、207カ所 (43.4%) だった。これは、障害のある子どもが在籍している園の81.5%、「気になる」子どもが在籍している園の72.6%に該当していた。また、障害のある子の受け入れと「気になる」子どもの受け入れの関連性に関する、 $X^2$ 独立性検定の結果が $\chi^2 = 93.6$ ,  $p < .01$ となり、極めて有意であった。

(イ) 幼稚園・保育所における「障害」のある子どもおよび「気になる」子どもを含めた行事「運動会」の活動展開

①運動会の実施状況と開催時期について

特別行事「運動会」は、1カ所を除くほぼ全ての保育所・幼稚園で実施されていた。実施していないと回答した1カ所は、その理由として、「(今までは行っていたが、)不審者の侵入等から子どもを守る」ことを挙げている。

開催月は、図3で示すように、10月が389カ所で最も多く (81.6%)、次いで9月が78カ所となり

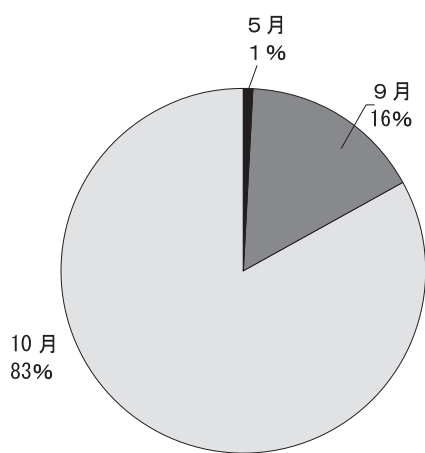


図3 運動会の開催時期

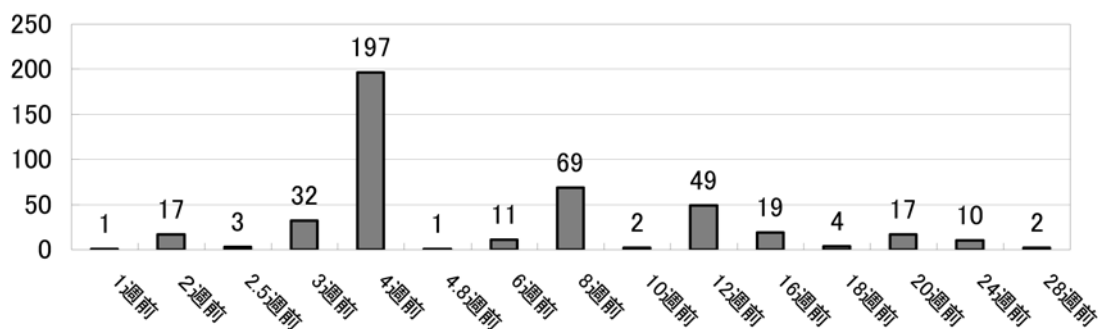


図4 運動会の導入時期

(16.4%)、両方で全体の98.0%を占めた。

②運動会に向けた活動展開と具体的な配慮や援助について

運動会を意識した活動の導入時期については、「4週間前」が197カ所と最も多かった (41.3%) (図4)。一方で、「ふだんの生活・活動の積み重ねなので、運動会を意識した活動は特に行っていない」という回答が、41カ所 (保育所：32カ所、幼稚園：7カ所、不明：2カ所) あり、この回答については、保育所と幼稚園で有意な差がみられた ( $\chi^2 = 8.57$ ,  $p < .01$ )。

障害のある子を含めた活動展開については、記述式で回答を求め、その結果を千葉大学教育学部附属特別支援学校の実践研究の枠組みを参考<sup>4)</sup>に、筆者ら5名で協議し、表2のように区分した。

全体的な傾向として、表2に示すように、障害のある子どもおよび「気になる」子どもに対して、保育士や教諭がさりげなく近くにいて、個別に声をかけたり、直接手助けを行ったりする『保育者が側についての配慮』を挙げた保育所・幼稚園が、およそ半数みられた。また、「学級全体に、その子への支援 (見守りや応援等) について確認する」「ペアになった子どもにその子との関わりについて確認する」といった『友達・学級集団全体への配慮』や「職場の合意として、一日、その子の側につくようにする」「特定の種目では、保育者が側につくようにする」などの『保育者の配置による配慮』、「練習の様子を離れて自由に参観できる状況をつくり、少しずつ参加できるようにした」などの『(個別的な配慮としての) 練習方法の配慮』について、いずれも3割近い幼稚園・保育所での記述が見られた。一方で、「練習のイメージが高まるような朝のお集まり

表2 具体的配慮や支援に関する自由記述の分析・整理の視点および結果

大分類項目	小分類項目	保育所	幼稚園	有意差
I 全体的な考え方	1 特別な配慮はしていない	4 (2%)	2 (2%)	
II 生活の流れでの工夫・配慮	1 年間の生活を通して	19 (10%)	7 (6%)	+
	2 運動会練習期間を通して	11 (6%)	13 (12%)	
	3 期間中の一日の生活の流れ	5 (3%)	3 (3%)	
	4 種目そのものの工夫・配慮	37 (20%)	11 (10%)	*
	5 練習方法の工夫・配慮	9 (5%)	6 (6%)	
	6 友達関係・学級集団全体としての工夫・配慮	55 (29%)	39 (36%)	
	7 保育者の配置による配慮	64 (34%)	28 (26%)	
	8 職員全体・保護者との共通理解	23 (12%)	16 (15%)	
III 個別の配慮	1 練習方法の配慮（参加度の調整等）	49 (26%)	35 (32%)	
	2 種目の工夫（参加度の調整等）	15 (8%)	11 (10%)	
	3 場の設定の工夫・配慮	29 (15%)	21 (19%)	
	4 保育者が側についての配慮	97 (52%)	51 (47%)	
IV その他	1 対応項目なし	1 (1%)	1 (1%)	

\*<.05 +<.10

をする」「朝のお集まりで話し合っ、練習種目を決める」といった『期間中の一日の生活の流れでの配慮』や「練習はできるだけ短時間で集中できるようにする」「一つの種目に時間をかけすぎないようにする」などの『(生活の流れとしての)練習方法の配慮』を挙げる保育所・幼稚園は、1割に満たない結果となった。

保育所と幼稚園による回答の傾向について、『種目そのものの工夫や配慮』に関する記述について、 $\chi^2=4.68$ ,  $p<.05$ となり、有意となった。

特に配慮が必要だった1名の子どもについて、当日の活動参加を5段階で評価してもらったところ、9割の保育所・幼稚園が、「大変よく参加した」「よく参加した」と回答した。一方で、「あまり参加しなかった」「ほとんど参加しなかった」と回答したのは、10カ所で、内、対象とした子どもの年齢が1・2歳という場合が6カ所だった。なお、クラスカル・ワーリス検定では、当日の評価の傾向と当日までの配慮や工夫点との間に有意な差は見られなかった ( $H$ 値=8.57,  $\chi^2(0.95)=21.0$ ,  $8.57<21.0$ )。

#### 4. 考 察

(ア) 運動会に向けた活動展開の実際について (全体的な傾向)

特別行事である「運動会」は、1園を除くすべての園が実施し、その時期は年度のおよそ中間(9~10月)である園がほとんどであった。運動会の位置づけに関する調査は、1987年に、宗高らが幼稚園教諭および保護者へ実施したものがあり、「園の方針や地域性のちがいによって、多少調査結果に相違はみられるが、ほとんどの教師や保護者は、運動会を数ある園行事の中でも高く位置づけている」という結論を導き出している<sup>5)</sup>。報告からおよそ20年経過した現在でも、「運動会」は、保育所・幼稚園また、そこに携わる保育士・教諭にとって、重要な位置や意味合いを持っていることが示唆された。

また、配慮を要する子どもを含めての活動参加に向けた配慮については、個別的な関わりや参加度の調整、友達や学級全体への配慮や保育者の配置による配慮等が3割近くを占め、運動会への当該幼児が参加できるよう、多くの工夫が行われている現状がうかがえた。

一方で、お集まりの内容を工夫するなど一日の流

れの中における配慮や、練習時間等の練習方法における配慮等、保育所および幼稚園で過ごす子どもたち全体の保育内容に関わる配慮に関しては、回答率が全体の1割以下であり、今後さらに検討が可能な領域であることが示唆された。

#### (イ)「保育所」と「幼稚園」で見られた傾向の違いについて

本稿では、得られた回答数の多さを受け、「保育所」「幼稚園」というフィールドの違いに着目した分析を行った。その結果、障害のある子どもの受け入れや、運動会に向けた活動展開への捉え方および具体的な配慮の一部で、フィールドごとの傾向が見られた。

まず、障害のある子どもの受け入れについては、今回の調査で、C県内における公立保育所が担う役割の重要性が示唆される結果となった。また、障害のある子どもの在籍がある保育所・幼稚園ほど、いわゆる「気になる」子どもの在籍傾向も高い実状がうかがえた。障害のある子どもの受け入れ先に関する現状は、石井(2009)が、幼稚園および保育所の園長等管理職に対して行った質問紙調査で、障害のある子どもの受け入れに関して、「障害の有無に関わらず可能な限り受け入れる」と回答した属性傾向とほぼ似た割合を示した<sup>4)</sup>。また、石井は、統合保育を行うにあたっての園の運営や経営に関する自由記述の中に、私立幼稚園の管理職の多くが、人件費の経済的負担をマイナスの影響として挙げている一方で、公立保育所の管理職は、加配保育士が確保できることで園全体の保育に余裕が持てることをプラスの要因として挙げている場合があることを指摘しており<sup>4)</sup>、障害のある子どもの受け入れ先に属性傾向が出る背景として、人的な配置を講ずることができるといふ点に関連していることが考えられた。

また、運動会に関する回答では、以下の2点で、保育所と幼稚園での傾向の違いが見られた。1点目は、運動会を「特別行事」として捉えるか、「普段の保育の延長」として捉えるかという、行事への考え方に関する点について、2点目は、運動会に向けた活動展開に際して、種目そのものを検討するという包括的な視野に立っての配慮を行っているかどうかという点である。須山ら(1999)は、運動会には、

保育観や保育方法が具体化されており、子どもの内面に育つものとしての描画にその違いがかなり明確にみられたことを実証している<sup>6)</sup>。すなわち、今回の結果から示唆された「行事の捉え方」や「活動展開」における違いは、子どもの内面に育つものにも影響を及ぼしていると推測される。実際にどのような影響の違いがみられるか等については、今後の検討課題として挙げられるであろう。

## 謝 辞

本調査にご協力くださいましたすべての保育所・幼稚園のみなさまに心よりお礼申し上げます。本研究は、平成17～18年度植草学園共同研究助成金の援助を受け実施したものであり、本論文の一部は、日本発達障害学会第43回研究大会にて、ポスター発表を行った。

## 文献

- 1) 佐藤慎二・高倉誠一・広瀬由紀・植草一世・中坪昇一(2005): 保育所・幼稚園における「障害」のある子どもおよび、いわゆる「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究(1) - 「運動会」における支援を中心として, 植草学園短期大学紀要, 第6・7合併号, 1-9
- 2) 高倉誠一・佐藤慎二・広瀬由紀・植草一世・中坪昇一(2007): 保育所・幼稚園における「障害のある」子どもおよび、「気になる」子どもの活動参加に関する調査研究(2) - 「運動会」の一連の活動を対象に-, 植草学園短期大学紀要, 第8号, 23-34
- 3) 千葉大学教育学部附属養護学校(2002): 実践 生活中心教育研究, 学習研究社, 19-22
- 4) 石井正子(2009): 幼稚園・保育所の園長等管理職の統合保育に関する意識-インクルーシブな保育に向けての現状と課題-, 学苑・初等教育学科紀要, no.824, 62-78
- 5) 宗高弘子・前橋明(1989): 幼稚園における運動会の現状分析, 日本保育学会第42回大会発表論文集, 562-563
- 6) 須山聡子・金田利子(1999): 子どもの内面に育つものとしての描画と保育観・保育方法の具現化としての運動会との対比的検討-幼児期の「保育の質」をとらえる手がかりとして-, 日本保育学会第52回大会発表論文集, 62-63